

學 界

臼井俊三氏著「倉庫論集」を読む

岡 本 理 一

本書は現在、東京灣倉庫株式會社の専務取締役である著者が、大正六年から昭和七年にわたり「國民經濟雜誌」や「大阪銀行通信錄」等に發表せられた十篇ばかりの論文を、三菱倉庫の學究社員、中島時雄氏が編集して一本にまとめられたものである。臼井氏の經歷については本書冒頭の「編者序」において中島氏が記述されてゐる通り、明治四十五年に東京高商を卒業され、直ちに澁澤倉庫に入社、つゞいて大正八年に三菱倉庫に轉社、昭和十八年に同社を圓滿退職、その後日本港運業會の要職にあつたが、昨年九月東京灣倉庫の設立と共に現職につかれた様で、その生涯の大部を文字通り倉庫と共にすごされてきたと稱して過言でない。

い。したがつて斯業の經營に卓越した識見と幾多の經驗を有せられ、また實務によく精通してゐられることは言ふまでもなく、夙に劇務の寸暇をみて倉庫經營の實證的研究に精進せられた成果は、結んでこゝに見事な著書となるに至つたのである。以て後進者の範となすに充分なものがあらう。

先ず本書各章の題名と發表年月を示せば左の通りである。

- 第一 倉庫寄託契約に於ける疑義（大正八年二月）
- 第二 倉庫寄託契約に於ける入出庫の意義 附 倉庫の意義に就て（大正九年六月）
- 第三 有價證券としての倉庫證券（昭和七年一月）
- 第四 倉庫證券の譲渡と債務の引受（昭和二年六月）
- 第五 吉住 稔氏「倉庫證券記載事項に就て」を読む（大正十二年七月）
- 第六 倉庫貨物の火災保險を論じ丸谷商學士の所説に及ぶ（大正六年十月）
- 第七 倉庫關係の諸問題
 - (一)我國倉庫業發達の一考察と商工都市の倉庫業（昭和四年八月）
 - (二)倉庫及上屋の意義（昭和四年九月）

(三)倉庫營業者の業務（昭和四年十月）

(四)出保管契約と保税貨物（昭和四年十一月）

第八 商港に於ける倉庫業（大正八年九月）

このうち第一論文より第六論文までは倉庫寄託契約と倉庫證券に關する法律的研究であり、第七、第八のものは倉庫一般に關する解說的論述である。したがつて「倉庫論集」といふも、それは二、三の特殊問題を専ら倉庫經營の實際の見地より論述されたものにほかならず、しかもその最も古きは今より三十年前に發表せられたものであるため、今日のごとき經濟社會の革新期に際會し、アップ・ツー・デートな倉庫の經濟理論や經營方策の要望せられてゐる時には、必ずしもすべての讀者に對し大なる興味をもたしめるとは保し難いのである。しかしながらこれらの諸論文は察するところ、著者がその時、その場所の必要に應じて説論されたものらしく、當初から體系的著述を意圖されてゐたものでない様であり、且もともと本書は倉庫從業員に對し必ず一度はつき當ることあるべき諸問題を解明

する鍵を與へるため編集されたものであるから、それは當然のことに屬し、むしろ虚心坦懷、精讀これ努める者に對し多くの教示を與へるのである。尙、本書の論述が専ら法律の見地よりの解明に終始し、國民經濟の見地よりの研究少きことについても、當時における我が商業學發達の程度よりみて、一應是認せられよう。蓋し我が國における商業諸學の研究は、倉庫論に限らず、交通論であれ、保險論であれ、將又取引所論であれ、その明治、大正の輸入期にありては、専ら商法中の當該規定に準據せる法律の解明が大部を占め、未だ國民經濟の見地に立てる研究には及ばず、而してこれは當時の資本主義經濟が充分なる發達をとげず、爲にこれら諸商業の經營は、その取引上の法律關係を圓滿に處理さへしてゆけば、まず順調に行はれ得たことよりみて、當然のことと思はれるからである。この意味において、業界人たる著者の諸研究が多く法律の見地に立てるは何等異とするに足らず、反つてその故にこそ、論文の生命が今日まで長く存續してゐるもの

とも言ひ得るのである。

次に本書所收の諸論文の内容については、すでに倉庫研究會編「世界倉庫文献」(昭和十八年六月)に簡潔な紹介があり、このうち第七論文は嘗て鳥城子なる筆名を以て昭和四年八月から同年十一月にわたり、大阪銀行集會所の「大阪銀行通信録」に發表され、斯論關係者には既知のものと思はれるゆゑ、こゝに改めて一々詳論するの要はないであらう。而してこれらの文中、我が倉庫論の先達、内池博士を内池學士と呼び(第一論文)、また前神戸商大學長の丸谷博士を丸谷商學士と稱してゐること(第六論文)などは、諸論文がともに我が商業學の生成期にできた産物であることをよく物語り、當時若くして研究意欲に富んだ著者が、實務上の體驗に裏付けられた旺盛な學究心おさへ難く、堂々天下の學者を相手に廻してその所論を批判せるごとき、如實に當時の我が學界の狀況を窺はしめ得、これを今日の倉庫論界に對比するとき、まことに隔世の感あるを禁じ得ないのである。

とまれ本書の刊行は、終戦後、日本倉庫業中央會の機關誌「倉庫」以外、何の著作もみない我が倉庫論界にとり、後進者の研究熱をあふる一つの機縁をつくつたものと言ひ得る。嘗て名著「倉庫經營論」をはじめ幾多の著作をおくられた我が國商業學の師範、内池廉吉博士は第一線より退かれ、また屢々卓論を寄せて斯界の向上に貢獻された二人の先覺——元名古屋高商教授の前馬治一氏は他界され、元高岡高商教授の向井梅次氏は教壇を退かれる等、今や我が倉庫論界は、再び往時のごとき眞摯、活潑なる研究の要望せられてゐる時にも拘はらず、そこに一抹の淋しさが感ぜられるのである。經濟の再建といひ、貿易の再開といふも、單なる掛聲や、地に着かざる机上の空論のみによつては何の寄與も受けず、それは再建方策の荷なひ手たる各企業の職能發揮に俟つて初めて成就され得るものである。顧て我が倉庫業の配給組織上に占める地位は決して華々しきものにあらず、その業務亦甚だ地味ではあるが、しかしそれが今日有する重要性については從來

のそれと何等異るところなく、或は物資の保管に、或は賣買に、或は金融に、等々演ずる役割は甚だ大きいのである。この點、今日の民間貿易再開にあたり、倉庫が海陸連絡機關として重要な地位を占めることは、一般世人の認識不足にも拘はらず、改めて大きく見直されねばならぬ。更にまた今回制定された「獨占禁止法」の施行にともなう業界今後の進路についても幾多の課題が横たわり、況して經濟社會化のごとき新思潮の出現に對應しては、今後の經營にあたり、新構想のもと、新方策をもつて望むことが要請せられるのである。かくて今や倉庫に關係をもつものは、學界人たると業界人たるとを問はず、新たな見地に立てる研究に精進して、第二、第三の「倉庫論集」を上梓するほどの心構へがなければならぬ。而してこのためには、今日我が倉庫論界の第一人者となつた中島時雄氏が先ず氏自身の「倉庫論集」を編集して、嘗て「倉庫時報」や「倉庫」等に發表せられたあの精緻にして異色ある諸論稿を集大成し、以て斯界に貢獻せられんことを願

望してやまない次第である。(B 6 版、三四三頁、昭和二十二年五月、日本倉庫業中央會發行、頒價三十五圓)

小樽經濟專門學校
創立三十五周年 記念論文集

「經濟再建の諸問題」第一卷目次

序 文……………	大野 純 一
完全雇傭と國家財政……………	丸山 泰 男
中小商業再建論……………	岡本 理 一
實存の倫理……………	川村 三千雄